

良くも悪くも子供の使い

里草会顧問 福井正樹

「叱られて」という童謡に、街までお使いに行かされているのが何となく物悲しい感じで歌われている。電話が小学校にしかない時代なので、ちょっとした用事でもお使いにやられた。伯母のうちなどが多かったが、これは途中雨に降られたり帰りが遅くなったりしなければそれほどつらいものではなかった。しかし多種多様なお使いをさせられ「子供の使い」という言葉があるように、あまり役に立たないことのたとえにされているようだ。

思い返してみると「子供の使い」の長所もあったと思う。大人が出かけると、あいそにお茶を飲んで世間話などするとますます時間が取られる。休む間もなく働いている祖父母を見ると、私がお使いに行くのは仕方がない役割だとは納得していた。ただ同級生のように兄弟が無いので一人で引き受けなければならない。兄弟があれば心細い使いは一緒に行けるし、あちこちに物を届けるような場合は手分けして分担できる。

どこかで火事があると、普段行き来のないあまり親しくないうちにでも、私がお使いにやられる。冬の間を作りためてあるむしろを、3枚くらい背負って届ける場合が多かった。校区を超えた広い範囲で火事があると、何もかも焼けてしまって不自由しているだろうからと、家で余裕のある物をそれぞれの人が届けて、少しでも役に立てばいいという感じの助け合いの慣習があった。受け取る方も名前を聞いても覚えているかどうかかわからないが、とにかく誰かが受け取ってくれた。

タケノコのシーズンにはタケノコを届けさせられた。あのうちには竹藪が無いから持って行ってやれという、ある程度の行き来のある家だ。赤飯を作ったらごく近所の神主のうちに届けさせられた。村を構成しているのは農家だが、村には農業をしていなくて何かの役割を果たしている寄留者がいる。そんなうちに周りの農家で作ったものを届ける。村の寄留者にも医者や教師など知的な指導者もあれば左官や大工や鍛冶屋のような技能者もあるし、乞食のように周りのお情けにすがって生活しているような貧しい人も居た。

このような届け物は子供の使いであれば余分なお世辞や大げなお礼や感情が入らないので簡単にすむ。届けた入れ物にわずかな駄賃（入れそめと言っていた）をくれる場合もあった。正月前には農家はどの家も餅をつくが、もち米を作っていない寄留者のうちには誰かが届けたし、受け取る方もそれほど恩にきる必要のないほどの慣習があった。このようなお使いは挨拶をするように、村の人間関係に溶け込んだものだ。お使いも通り一遍のことですむ。無縁仏やお地蔵さんにも牡丹餅などお供えする感覚だ。

今でも覚えているお使いは理不尽な結果であったり不安であったり嫌な思い出だったりするものがある。大切なお客が来ることになって酒を買いにやらされた。酒屋は同じ校区にあるが学校より遠い場所で、一升ビンを下げて帰ってくるのはちょっとした重労働だ。下げたのでは持ち重りするし地面に届いてしまうので、時には抱えて抱くようにして帰ってくる。酒屋は農村の加工業であるがよほどの財産家でないでないと経営を維持できない。秋に

仕入れたコメを春までかかって醸造し、それを順次売り上げて、金が入るのは盆と正月の節季なのである。

うちでは掛けで買うこともないし、普段は清酒を飲むこともなかった。金を渡されて一升びんをもって酒屋に行ったところ、その金では酒一升は足りないといわれた。酒屋のおばさんは焼酎ならそれで足りるというのだが、酒と焼酎の違いが分からない。焼酎は酒よりよく回るというのだから、価値があるのだろうと思った。逡巡して意を決して焼酎を買って帰ったら、こっぴどく叱られた。客が来る寸前でもはや買い替えに行く時間もない。いわゆる子供の使いで、状況判断や応用が利かないこともあるが、しかし渡された金が足りなかったのだから、自分を責められても納得がゆかなかった。客に申し訳ないと思うものだから、余計私を叱るので客がとりなしてくれた。

叔父に丁寧な地図を渡されて、鶏の雛を受け取りに行ったことがある。小学校の校区より遠くで、中学生になってその家が農業の教師のうちだったと分かった。3か月くらいの成長した雛で、雌とはっきり判り間もなく卵を産み始めるほど育っている。おばさんは話が伝わっているらしく、鳥小屋から三羽捕まえて持って行った大きめの麻袋に放り込み、口をしばって背負い籠に入れてくれた。ときどき鳴き騒ぐので、飛びだして来たらどうしよう、中で死んでしまわないのだろうか、と気がかりだ。背中に伝わる振動を感じながら長い道のりを駆けるように必死で家に帰った来たこともあった。

お使いで最も嫌だったのは、鍛冶屋に行かされることだった。鍛冶屋は隣の校区にあって、少し離れて二軒あった。農村ではその風土にあわせて野道具などは特徴のある物を鍛冶屋が作り供給していた。私の使っている鉈は子供のころから親しんだものを持ってきているが、市販されているものとはだいぶ違う。軽くて先端に鳥のくちばしのようなでっぱりがあり、薪を割ったり枝を払ったりして勢い余って地面に当たってもこの出っ張りが刃を守る。軽くて柄の部分も鉄で、枝など手繰り寄せるのにもこの出っ張りを鉤にして引き寄せられる。各地の土壤に適した農作業の道具が生み出されてきて、それぞれの土地に刃物の生産地があり鍛冶屋もある。

農作業に合わせて鋏など使い分ける。その専用の鋏はシーズンが終われば次の使用時期まで鍛冶屋に預けて先掛けをしてもらう。畦塗が終わればこの幅広い大きな鋏は、来年まで使わないからだ。鋏によっては順繰りに先掛けをするものもある。先掛けとはちびた部分を鋼などを足して改めて鋭く鍛えなおすことである。

この名張では鍛冶屋が村を廻って修理品を集め配達していたようだが、但馬ではてんで鍛冶屋に持って行っていた。行っても閉っている時もあり、預けてあるのを受け取ってこいと言われてもできていない時もある。できるまで待ってもらってこいと言われても時間が来たら明日だといって締め出される。大人が来ると手のひらを返したようにへりくだって機嫌を取りながら直してやるが、子供は無視する。ある時余り不誠実なので別な鍛冶屋に行けと言われたが、鍛冶屋どうし縄張りがあるのか、いくら頼んでも「あんたここは隣の鍛冶屋だ」と全く取り合ってくれなかった。